

## だあれもしらないつらつかわ

「よっ、おかえり。ぐはっ」

あたしたちが戻ってきたとき、かおるちゃんはずー  
ナツ屋台から声かけてきた。いつもどおり。だけど、

「おかえり、じゃないわ、かおるちゃん！」

となりのミキたんが、最初に声あげたよ。そのと  
なりでブッキーも、腰に両手あててにらみ顔になっ  
てる。

そうなんだよ。いつきなりあの赤ちゃん——はぐ  
たん、だっけ？——に呼び出されて、時間止めちゃ  
うヤツのところで、いーっぱいのプリキュアと一緒に  
なって戦ってた、ってうちのにき。

「タルトと一緒に来てたんじゃないの?。」

あたしが思いっきり声出したら、サングラスの両  
側に手のひらが出てきた。

「やあ、ごめんごめん、ラブ嬢ちゃん。ごちよっと

忙しくてね、そっちには行けなかったんだ。別に遊  
んでたわけじゃないんだけどさ」

そりゃ、一緒に戦って、なんて言わないけど、声  
ぐらいかけてくれてもいいじゃない。 って、忙  
しかった?

「かおるちゃん、なにがそんなに忙しかったの?」  
ブッキーが首か上げて割り込んできた。

「ちよっとね、ゴミ拾い。げはっ」

あたし、思わずとなりのふたりと顔見合わせちゃっ  
たよ。

「ゴミひろいい??」

「そ、拾つとかないと危険だからねえ。みんなで拾っ  
て、ぼーい、ってさ——」

\*\*\*\*\*

「——お、おい、どうしたんだよくるみ! いきなり  
止まんなって! って、こらココ! ナツも! なに

3 だあれもしらないうらっかわ

動かなくなってるんだよ！」

いきなり目の前で起きたことに、俺はただ叫んでまわるしかできなかった。

いつもの学校帰り、ココさまココさまってうるさいのがピタつとやんだんで、なんだ？って振り返ったら、3人が止まってたんだ。ココもナッツも歩いてる足を上げたまま、くるみなんか、ココの前に回り込もうとジャンプしたまんまで。

「いや、よく見りゃ3人だけじゃない。木の葉っぱは風に吹かれたままだし、池の波もそのまんまだ。俺以外、みんな

「あー、つつかないどいて、鳥くん。しばらく動かないから。時間とまっちゃったみたいでねえ」

「な、なんだ？ おっさん??」

いきなり声がかして振り向いたら、サングラスのおっさんがいた。

まえに、菓子屋まで連れて行かれたことがあるおっ

さんだ。たしか

「かおるちゃん、でいいよ。いま、イ又耳な髪型の子が呼ばれていってるから、しばらくは待ちだねえ」

なんだって、犬耳っぽい髪？

「のぞみか!？」

「そうそう、ウチの世界のプリキュアも一緒に助けに呼ばれちゃっててね。なんで、こっちの世界のフォロ―、頼めるかなあ？ ほら、その紫髪の子なんて、時間が動き出したらスツ転びそうでしょ？ 危なそうなもの避けたりとか、クッション敷いたりとか、さ」

ジャンプしたまんまのくるみの格好に目が行って、おもわずはあつ、とため息ついちゃった。

わけのわからねえおっさんだけど、この前だっちゃんど帰れたんだ。また時間が動き出すっていうなら、

「しょうがねえ、ここは俺がやるよ。おっさんはほかの世界で声かけてくれ。俺みたいに動けてる

の、探すの大変だろ？」

「ああ、それならいまやってるよ」

とりあえず、くるみの足元の石をどかさうとしゃがんだまま、俺は首だけ上むいた。

いま、やってる、って？

「そ。12人に分かれて、12コの世界に行ってるの。オレって天才だから。ぐはっ」

\*\*\*\*\*

いつもの植物園の午後。外を見れば穏やかな日差しと柔らかく吹く風で、木々の葉がきらきらと光るはず、なのだが。

うむ、動かない。砂漠の連中　ではなさそうだが。

葉も、日差しも、通りかかる人も、そして植物園を流れる水路の水も、すべてが止まってしまってるし、吾輩の足や腕も動かない。いかに砂漠の親玉

でも、このような真似はできない。

「さすがですねえ、コツペの旦那」

目をやや下に向ければ、サングラスの青年が見上げていた。

かおるちゃんか。ということは、ほかの世界からの干渉かな？

以前、菓子を作るため、世界を渡りに連れて行かれたことがある青年だ。この世界とは別の、プリキュアの世界の者と聞く。こんなときに現れたなら、理由はそれしかならう。

「わかりが早くて助かりますよ。とりあえず、動きますからね、つとー！」

青年の掛け声と共に、手足が自由になった。ふむ、きみは大丈夫なんだな。

「はいはい。なんたってオレは天才ですからね。ぐはっ」

相変わらず惚けた口調だが、

5 だあれもしらないうらっかわ

「ただではあるまい。なぜ動ける？なにをやっているのだ？」

「かないませんねえ。ま、世界を渡つた人は、時間止まりにくくなるみたいなんでね。」

プリキュアのいる<sup>13</sup>の世界で時間止めちまおうつてヤツがいたんで、抜けだしたんですよ。止まっちゃった人が動き出したときに困らないように 12人に分かれて、ね」

なるほど。吾輩も一度世界を渡つた故<sup>ゆえ</sup>、手足が動かない程度で済んだわけか。

そして、

12人分の人生 寿命を削つて、かな？

吾輩の言葉に、青年の口元がニヤリと笑つた。

「とりあえず、あの子たちにはナイショですよ？」

ふふ、相変わらずではあるか。自ら望んで他人の

12倍も老いてゆくとは ン？

待て。12人？世界は13なのにか？

「最後のひとつにや、プリキュア<sup>みん</sup>が呼ばれてて、直

接闘つてますからね。そこはあの子たちにおまかせですよ。それにねえ 時間止めたヤツら、その<sup>13</sup>

世界ぜんぶを、ひとまとめにしゃがつてますし！」

吾輩の言葉に、吐き捨てるような声が返ってきた。

ふむ。

怒っているな？ 以前には見なかつた顔をしておるぞ。

目だけをじろり、とサングラスの奥に向かわせる

と、青年の両肩が大きく動いた。

「はあ ホント、旦那にやかないませんや。」

<sup>13</sup>の世界——いまプリキュアのいる世界だけ狙い撃ち、つてのが気に入らなくてね。プリキュアさえいなければ、やりたい放題できる、って言つてのと同じですからねえ」

パキッ、と何かが壊れる音が聞こえてきた。おそ

らくは、握られた青年の手の中の何かであろうな。

吾輩は目を上に向け、

なるほど。それは確かに、黙つてはおれんな。

「そう言ってくれると思つてましたよ。さ、嬢ちゃんたちだけで戦つてんじゃない、つてとこ、ヤツらに見せてやるつじやないですか」

その後ろから、かすかに聞こえる音に耳をそばだててから、眼に言葉を乗せた。

うむ。プリキュアの友にして伴たる吾輩たちの出番だな。心得たぞ、かおるちゃん！

\*\*\*\*\*

植物園から青年が出てゆくのを見送つたのち、吾輩は先程聞こえた音に目をやった。

さて、手伝つてくれるかな、男爵。

パイナップルの木の陰からは、思つたとおり的人物が現れた。シルクハットをかぶり、片目を隠した大きな男――

「手伝つ？ バカを言つな。さっきあの男が言つただろつ、プリキュアさえいなければやりたい放題でき

ると思つてゐる奴等がいる』とな。それは俺も気に入らん。すこぶる気に入らん！ それだけだ」

以前は一緒に居た子供は連れていない。年月という世界を超えねば、止まつた時には逆らえんかそれもまた、この強い憤りの一部なのであるつな。

気に入らん相手が同じであれば、手を結んでもよからうつ、か。

「お前と手を結ぶつもりはない。で、お前はどこから行く？ 私は別のところに向かおう」

手か。

吾輩は己と男爵の手を交互に眺めた。

たしかに、吾輩とでは手をとれぬな。だが心の手は結んでおる。とりあえず、動いている者と、動きだしたら危険そうな者たちを頼む。特に飛び出しそうな者をな。男爵にはわかるだろつ。きつと。

吾輩が軽く手を挙げると、そこに大きな――人としては、だが――手のひらが当たった。あくまで軽く。

「おかしな信用の仕方だ。だが、いいだろう。まかせろ！」

\*\*\*\*\*

「え？なに動かなくなってるのよこのピカ！ピカリオ！ちよつとおっ!!」

シエルたちがデッカい機械と一緒に飛んでったと思ったら、アタシのまわりはいきなり動かなくなっただワ。

隣にいたこのピカまで　もう！

「ええい、動けつてのっ！」

「ああ、ちよつとまって。無理すると身体いためちゃうからさ」

あん？

いきなり背中から聞こえた声に振り返ったら、サングラスかけた男が立ってた。でも、この顔、どうか　ああつ！

「ピカリオのお菓子の人!?!」

そう、ピカがお菓子をもたらったから、返したいって作ってたクッキー、大きな鳥と緑の三角、それにサングラス！

「聞いているんだ。そりや都合がいいや。いま時間止まっててねえ　この世界じゃいま動けるのはきみだけみたいだね、緑髪の嬢ちゃん？」

時間が、止まってる？

「時間をまた動かすために、オレやきみとこのブリキュアが呼ばれちまってるんだ。それで、ちよつと手伝ってもらいたくて　どうか、したかい？」

アタシの顔を、サングラスが覗き込んできたワ。

「止まっただまじゃ、だめなのヨね？」

じつと目を見てひとこと言ったら、サングラスはあごに手を当ててちよつと考え込んで、

「みんなそのへん誤解ごかいしててね。時間止めりや永遠だとか——そんなこたないんだよ。もともと時間止めて生きられるようにできてないんだわ、これがね。

くは  
「

「 やったこと、あるのネ? 」

「 アタシはピカの顔を見ながら言ったワ。シエルが消える前、追いかけようと齒を食いしばった顔。いま動いても、追いつきゃしないッてのに。」

「 同じ同じ、緑髪の嬢ちゃんね。止まったように止まってない。そうなる人間おかしくなるんだよねえ」

「 アタシがおかしい、って言いたいワケ? 」

「 おかしくない? オレはおかしくなったねえ。天才になつたし、ぐはっ」

「 アタシのことも知ってる、か。だつたらいいワ。」

「 ハッ! ばかばかしい 　　って言いたいとこだけど、まあアタシもおかしなおばあちゃんだワね。キラヤピカをこんな風にはさせらんないわ。」

「 なにすりゃいいのサ。ほら、さっさと言いなさいヨ! 」

\*\*\*\*\*

「 ( ) 　　んで、こんな猫になんの用だい。サングラス兄さんよ? 」

「 いつもどおり、パンパカパンの前で寝転がっているオレのところに、この兄さんがいきなりやってきたんだ。」

「 風も止まって声も聞こえなくなって、パン屋からも誰も出てこないし、なんかイヤな感じはしてたんだけどな。」

「 はは、猫つたつてただのじゃないでしょ、コロネのじいさま。ちょっと手伝って欲しいんだけど」

「 この兄さんが来るとき、ってのはロクなことがないんだよなあ。けどヘンだな。口調がちょっと早い焦ってるのか? 」

「 コロネ! 」

「 とつ、今度は山の方から女の子が転がってきたぞ。」

「 咲が、消えたわ。 舞も! 」

「なに、どうなっているの!？」

赤髪の子——満、だけじゃなくて、青髪の子——薫まで息切らせてる。こりや、寝てる場合じゃないか。

「ああ、残りの子も呼ばれたのかい。そんなじゃ、準備はじめないとね」

ん？ 兄さんがサングラスかけなおしたぞ。こりやあ

「誰!？」

「通りすがりのドーナツ屋だよ」

起き上がったオレは、満と薫の前まで歩くと足を踏ん張って、兄さんを見上げた。

(いま、『準備』とか言ったな。なんのことだ?)

「答えによつては、ただでは帰さない!」

オレたち3人がならみつける中、兄さんはもう一度サングラスをかけ直すとき大きく息吸って、

「満ちゃん、と 薫ちゃん、だったっけね。ふたりに、ちよつと頼むよ」

吐いた息と一緒に、オレたちに笑いかけた。

「頼む?」

「なにを?」

けど、オレには見えたぞ。額の汗が。どつやら本気、か。

「自分がよく知ってるプリキュアに、ちからを、ね。ぐは ととと?」

どこからか取り出したドーナツ掲げて言つ兄さんの腕に、俺は登ってやった。

(プリキュアにちからを、か。いつでもいいぞ。なあ満、薫もよあ?)

\*\*\*\*\*

「おーい、鳥くん。こつちはどうだい? 誰か出てったかい?」

サングラスのおっさんが戻ってきたとき、オレは説明に追われてる途中だった。けどよ、

「ちつ、やっぱ知ってやがる ああ、さっきくるみ



が、空に消えやがったよ。のぞみの声に呼ばれてな」

「そうかい。ンじゃあ、そろそろだな」

おっさんが見上げた空は、ちよつと色が変わってる。

「あん？」

空の向こうになんか見えた気がして目をこらしてたら、背中にぼんつ、と手に乗ってきた。

「鳥くんのちから、貸してほしいんだよ。そっちの王子様ふたりのもね。げはっ」

王　　つて！

「なぜわかった？」

ベンチに座ってたナッツがオレの前に出ようとすののを、後ろからココがおさえた。

「ナッツ。今は気にすることじゃないよ。シロップの話だと、彼は味方だ。プリキュアの味方だ」

「きみらのプリキュアだけの味方、ってわけじゃないんだけどね」

オレの背中から手が離れたと思ったら、サングラスのおっさんはオレたちみんなに背を向けて、空を

見上げた。

「さっき、こまちも呼ばれていった。

ちからを貸せ、だったな？ 方法を教える。今すぐ、だ！」

ナッツの声にうなずいたおっさんは、手を空にかざしたんだ。ドーナツ持った手を

\*\*\*\*\*

「さあて、コツペの旦那に、男爵さま、用意はいいかい？」

四方行ける限りを飛び回り、時が戻れば飛び出す者を抑えて回った途中、俺はいきなり大妖精に呼び戻された。

まあルー・ガ　いや、オリヴィエ以外に危険な者はいなかったが、それでも、

「用意とはなんのことだ、若造？」  
ステッキで地を叩いて言う俺に、サングラスの若

いのがニヤッと笑った。

「危険な子つてのは、すぐ動き出しかねない子でね。いま他に動ける人いなかったんでしょ、男爵。だから、この世界じゃこの3人でやりたいんだけどさ」

ふん、説明せずには、ずいぶんと小賢しい！  
俺は思わず杖を握り直した、が

正確にはフラワーやゆりくんも動けたんだがな、いまさつき呼ばれて飛んでいってしまった。

大妖精がぼつりと言つのを聞いて、俺は上げた杖を引いた。主のプリキュアに残された大妖精、か。

「そろそろ向こうつても、ちからが欲しい頃合いでしょうよ。だから送ってやるつてんです。こっちからね

よおし、いまからドーナツ投げるから、そっちに向かって祈ってよお」

この大妖精が納得しているのなら、手伝ってやらないこともない。だが、

「なぜ、それで届けられる？」  
「天才だから、オレ。くはっ」

俺の問いに、間髪入れぬ答えが返ってきた。

ちからをプリキュアに送る それは構わん。構わんが、天才だと？ そんな不確かなことで――

（いいワ。やってやろうじゃないの。あたしだけ置いて勝てると思ったこと、後悔させてあげるっ!!）

その瞬間、聞いたことのない声とともに、緑の髪の少女の姿が、隣に見えた。

\*\*\*\*\*

「うわあ、なんだこりゃ！」

「だれか、そこにいるの？」

話し声がそこかしこから聞こえる。いままで隣には男爵と青年しか居なかったはずだが、ぼんやりとしたもやの向こうに、人々が居るのを感じるのだ。子供が、大人が、老人が、吾輩と同じ妖精たちが。そして、サングラスの青年 かおるちゃんが、もや

のなかにひとりづつ、合わせて12人！

『さあ、そんじゃみんな』

木霊のごとく聞こえてくる12の声と共に、ぼいっ、とかおるちゃんたちが、なにかを投げた。12個の茶色くて丸いものがぐるぐると宙を舞って止まり、虚空に重なつたハートの穴は、窓のごとく見える。

『あれ目がけてさ、ちから送ってやってよ』

茶色く丸く、ハートの穴の空いたそれは以前にも見た。たしか、

「ドーナツう？ 大丈夫なのかよ、あれ」

『大丈夫、天才だから、オレ。くはっ』

あたりのざわつきに、疑念の思いが混ざり始めたのを感じ、吾輩は口を開いた。

天才かどうかは知らぬが、今迄この青年の言うことが間違っていたことはない。吾輩は信じるが？

吾輩の大きな緑の身体から、もやの果てに響き渡るよう大声を上げると、周囲のざわつきが少しばかり引いて、それぞれがドーナツを見つめ始めた

\* \*

「これに、いのなの？」

『ああ。ハートのドーナツってのは、ハートを届けるもんなんでね』

\* \*

「ハートを とどける ？」

『そう。きみが知ってるプリキュアに、ハートのちからをね。くはっ』

\* \*

「俺のちからがハートかどうかは知らんが」

届くのであれば是非もあるまい。

「さあ、もってゆけー！」

\* \*

「いくわヨ、ほらピカ、動けるようになったんだから、あんたもっ!!」

「わかってる！ いくよ、姉さん！」

＊＊

「わたしたちも、薫」

「ええ、満。コロネも、お願い」

＊＊

「……………プリキュアにちからを!!!……………」

\*\*\*\*\*

消えてゆくな、かおるちゃん。

いつの間にか隣にいた、でかい緑のおっさんがそ  
う言った。さっきまでぼんやり見えてた奴らが、ど  
んどん白いもやに隠れていつたら。

さっきまで12人いたサングラスのおっさんは、ひ

とつにまとまっちまってるしな。どんな人間だよ、こ  
のおっさん。

「そうですねえ ま、これでもう思い出すことも  
ないでしょうけど」

ん？

「これ覚えてるのは、こないだ一緒に世界渡ったこ  
の3人——コッペの旦那と、鳥くんと、オレくらい  
ですか。それでいいんですよ。なんにもなかった、で  
ね。ぐはっ」

そう言えば、男爵も消えておるな。

見まわしたら、コロモナッツもいない。本当に3人  
しかいなくなってるぜ。どこでもない、白い世界で。  
「みんなは忘れちゃっても、連中は覚えてますからね。  
もうこつちの子たちには手え出さなくなるでしょ。プ  
リキュアだけが相手じゃない、世界12コまるごと相  
手なんだ、ってわかつたろうから。ぐはっ」

なるほど、それが目的か。

「そのために、オレたち走り回ってたのかよ」

こっちは誰か倒れそうなヤツがいなか、本気で探したつてのに、このっ！

いきなり『プリキュアを助ける』では動かぬ者も居るだろうしな。男爵など、うまく焚き付けたものだ。

「そのくらいはしますよ。そりゃ、やつぱ子供たち<sup>プリキュア</sup>はかわいいから。どの世界<sup>どの</sup>でもね。ぐはっ

さ、元の世界まで送るよ。車に乗った乗った」

つむ。

緑のおっさんが車の屋根に登って横になったのを見て、俺も黙って車に乗り込んだ。

言いたいことはあつたけど、さいごにサングラスから、小さな声が聞こえちまつたからな。

(世界の平和もいいけどね やつぱ——)

\*\*\*\*\*

「——もう！なにいきなり黙り込んでんじやって！」

あたしがどなつたら、かおるちゃんやつと、あたしたちの方向いてくれた。

「ああ、いや、たいしたことじゃないんだけどね」

頭かいて笑つてるけど、ゴミ拾いなんて言つて笑つてたと思つたら、そら見上げたまんまでじつとしてるんだもん、おかしくなつたのかと思つたじゃない。ブッキーにミキたんまで、しばらく近づきもできなかつたんだから！

「ひろつてばーい、じゃ確かにたいしたことじゃなさそうだけど、ホントにそれだけ？」

ミキたんがじとつ、て目でおおるちゃん見つめた。ブッキーも、あたしも多分おんなじ目してるはず。

「ちゃんと帰つてきたんだからいいじゃないの。たまには出張しないこともあるって、天才なオジサンでもさ。がはっ」

じと目3人じゃ効果ないかあ。先に帰っちゃったせ  
つなもいれば、もちよっと喋ってくれるのかもだけ  
ど あれ？

\* \*

(世界の平和もいいけど やっぱ、うちの子<sup>ブリキョウ</sup>たちが  
元気で帰ってくることを。これが一番だからさ——)

\* \*

「かおるちゃん、いまなんか言った？」  
ないない、って手を振りながらドーナツ屋台に戻っ  
てくかおるちゃん見ながら、あたしたちちよつとだ  
け顔を見合わせちゃった。

いま、たしかに聞こえた気がしたんだけどな

—おしまい—

## クリスマスにはケーキもって

「ラブちゃんってさ、このまえ、パティシエのプリキュアさんたちに会って来たんだよね？」

「ん？ なーによいきなり。あの、時間止めちゃうヤツのときでしょ？ ブッキーだって行ってたじゃない」

「私たちは後から駆けつけて、終わったらすぐ引き上げたから、会ってないのよ」

「ミキたん？ あそっか　で、パティシエの子たちがどうかしたの？」

「ケーキ作ってもらえないかな、って」

「ケーキって、クリスマスケーキ!? イブは今日だよ!!!」

「そうなのぉ〜」

「パティシエの友達もできた、って、うっかり言っちゃったみたいなのよ。ブッキーのお母さんが乗り

気になっちゃって、うちのお母さんにまで話したもの」

「そっかあ。でもなあ、あそこへの行きかたは、あたしもわかんないし　え？」

『やつほー。聞こえる？ キュアホイップだよっ』

『わたしたちが作ったケーキ、ひとりに一つづつ送ったよ。あぶないところを、みんなに助けてもらったもん。もつ買っちゃったかもしれないけど、食べてね。』

じゃ、メリー、クリスマス〜ス!!!』

「よ、よかったね、ブッキー。なんかへんけど、これで解決、かな？」

「しっ！　まだ声終わってないみたいよ」

『　ところで、ドーナツの車に乗ったサングラスのおじさん、だれか知ってる？ ケーキなら、プリキュアみんなに届けられるよ、って言うからお願いしちゃったんだけど　』





たよ。あぶないところを、みんなに助けてもらったもん。もう買ったちゃったかもしれないけど、食べてね。

じゃ、メリー、クリスマス〜ス!？」

「ケーキ!!!」

「送ったって言ってるけど、ない よね？」

「ええ、どこにも きゃっ!」

「ほーっほっほっ」

「な なに? 赤と白の服 サンタ?」

「 じゃないよ! 満 薫 なにサンタ服着てるのさ?」

「おおぞらの樹で、これと一緒に渡されたの。はい、ケーキ」

「ひとりひとりつつつ。私達も、あのとぎ手伝ったからもらった。律儀な子ね」

「はあ、そうなんだ ってちょっと、ひとつ多いよ?」

「咲だけ食べてたら、みのりちゃんがかわいそう」

「私達は、ひとつで十分」

「だ〜っつ! そーいうのはあたしがイヤだ、って、何度も言ってるでしょうが! ちよっと、舞もなんとか言って 舞?」

「いま、おじさんおばさんに許可もらったわ。それじゃ、行きましょ」

「行っつて、パンパカパンに?」

「いいけど、着替えてから」

「あ、なるほどね。さあさあ、そんじゃ行こっか。もらったケーキ4つと、サンタふたりで、ぱーっとクリスマスだよ♡」

\*\*\*\*\*

「はいよ、これで全部、だね、っとお」

(おいおい、これ全部かい?)

「ああ、ここは4人だからねえ。おっきな樹の方の

ふたりには、サンタさん役もお願いたいしき。頼んだよ、トナカイさん、つとあ。ぐはっ」

（いてて、なんだい邪魔っけなツノなんかかぶせやがって だいたい、オレは猫だぞ？）

「でも、協力してくれるんでしょ、コ〜ロネくん？ げはっ」

（ちっそりゃあ咲のためだってんならな。しっかしこの重いソリ、猫一匹で引つ張れるかねえ お、お

おおお？なんだこいつ、勝手に動くぞ!?!）

「ああ、あのおっきな樹の子に話っけといてあるから、勝手に行くと思っよ。そんじや、よろしくぐはっ」

「 終わったみたいね。それじゃあなたも帰りましょうか、かおる、ちゃんっ！」

「え？お、おわわわっ！せっちゃん嬢ちゃん!」

「世界を移動できるのは、かおるちゃんだけじゃないんですからね。私やウエスターたちのケーキ運ん

できたとき、あとをつけさせてもらったわ」

「車ごと移動とはねえ。アカルンちゃん、無理させすぎじゃないの？」

「それはもう、全部の世界のプリキュアにサンタさんやる人相手ですからね。せいっぱい、がんばったわ。ね、アカルン♡」

さあ、覚悟して。心配かけたみんなから、お置き受けなさい！」

—おしまい—